

巻頭言

岩崎千夏(熊本市現代美術館副館長)

アートガマダス(AG)は、熊本市現代美術館の1年間の事業や研究論文などをまとめたものとして発刊してきました。

この2018年度版も、桜井武館長がいつものように多様な視点で1年を振り返ってくださるものと思っていましたので、巻頭言をどうするべきか迷っていました。

しかし、2008年度からずっと私たちの先頭に立ってくださっていた桜井館長が、体調を押して、ほぼ休むことなく関わり続けてくださった2018年度という年の現代美術館を、ここに振り返っておきたいと思います。

2018年度は、美術館を運営する「公益財団法人美術文化振興財団」にとっても大きな節目の年でした。

公立施設を管理する団体を競争原理によって決める指定管理者制度。

私たちはこの10年間、現代美術館の運営を引き受け続けるため、2回の公募を乗り越えてきました。この年、2019年度からの現代美術館の指定管理者について、ようやく私たちの活動が認められ、非公募による指定管理が、候補者選定委員会並びに議会で承認されました。

これはまさしく、桜井館長が11年間発し続けた「美術館は市民のためにある」という言葉と、それを信じ、体現してきたスタッフの行動の結果であったと思っています。

2018年度は、各担当者の力のこもった展覧会が続きました。

4月末に開会した「渚・臉・カーテン チェルフィツチュの〈映像演劇〉」展は、美術館で「展覧会として演劇を見せる」という、大変挑戦的な展覧会でした。「演劇」とは、通常「演じる人」と「見る人」が同じ空間を共有するものだと思われています。その魅力は、ナマの人間が演じる迫力や臨場感なのではないでしょうか。今回、美術館で実践しようとしたのは、「映像演劇」の中と外で、「同じ場を共有する」ことができるか、という挑戦でした。

会場の非常口の前で「この扉を開けないでください」と語りかける男性《A Man on the Door》、ぼんやりと人影が映る幕の向こうから話しかけてくる人たち《The Fiction Over the Curtains》、楽屋で友人に話しかける女優・・・《楽屋で台本を読む女》。一方的に映像作品を見ているつもりだったのに、気がつくやうに頭の中で問われたことに答えている自分、「誰か」に話しかけている人の映像を見ているつもりだったのに、話しかけられていたのは自分？

どの作品も、映像の向こう側とこちら側の境目が曖昧になる瞬間があり、そこには確かに「演

劇」の生々しさが存在していました。

これまで、芸術の分野として当然のように「音楽」「演劇」「美術」といったジャンル分けがされていて、「舞台芸術」は劇場、「視覚芸術」は美術館と思われてきましたが、その境目が溶解しつつあるようです。10年後、20年後には全く新しいジャンルが生まれているかもしれないし、或いは全てがひとつになっているかもしれない、未来のアートや美術館に様々な可能性を感じる展覧会でした。

6月末からは、「蜷川実花展 一虚構と現実の間に一」を開催しました。これは、読売新聞文化事業部と共に企画した巡回展で、熊本が初会場。来場者は4万人を超えました。

蜷川実花というと、毒々しいほど華やかな造花、或いは造花めいた生花や金魚、作り込んだ世界観の中で究極の「その人」を演じる著名人など、ものや人を強い光の中に晒して撮る写真家というイメージを強く持っていました。今回の展覧会は、その裏にある作家の素颜や繊細な一面を色濃く感じるものとなりました。世界から期待される大きなプレッシャーと責任を背負った写真家、映画監督でありながら、蜷川幸雄という父親を亡くした一人の娘であり、子どもを愛する母親である蜷川実花。別世界の人のように感じるかもしれませんが、本人は実にチャーミングで魅力的な一人の人間であり、女性なのです。

展覧会のサブタイトルである「虚構と現実の間に」。私たちは皆、いくつもの自分を演じ分けていて、どれが虚構でどれが本当の自分かを意識しているわけではありません。むしろ、どれも本場で、どれもどこか虚構なのかもしれません。蜷川さんもまた、虚構と現実の間に揺らぐこともあるのでしょう。しかし今回、この展覧会を通して、彼女自身がその揺らぎを受け入れ、受け止める決意をされたような、一服の清々しさを感じました。

9月からは、「魔都の鼓動 上海現代アートシーンのダイナミズム」展を開催しました。担当者の並々ならぬ意欲によって実現したこの展覧会、上海の現代アートシーンを見せるという、ややマニアックな内容にもかかわらず、アジアの現代美術の展覧会としては異例の1万人を超えました。

まず会場の入口で来場者を迎えるのは巨大な孔子の像《Q Confucius No.2》(張洄)。孔子は胸まで水に浸かり、心臓がゆっくりと鼓動しています。見上げるような像は、誰もが知る歴史上の人物でありながら、中年体型の脂肪に覆われた丸い肩、白髪交じりの髪とひげ、少し開いた口からはすきっ歯が見えて、なんだか衰れをそそるとともに、親しみを感じてしまいます。それ以外の作品も、演劇性が高く美しいモノクロームの映像《一年之際》(楊福東)があるかと思えば、日本のアニメ大好きという作家によるヒーロー物の映像作品《器世界の騎士》(陸揚)、なぜか心地よい風景画や抽象画《家と人民元》(余友涵)他、不思議な妖怪たち《大移動》(小龍花)、山水画と現代メディアが融合した現代版山水画とも言うべき作品《夜遊記》(楊泳梁)など、バラエティに富んでいて、飽きさせない内容となりました。ほとんどが日本、特に熊本ではほとんど知られていない若手作家たちの自由で多様な表現は、私たちが普段ニュースなどで見る中国のイメージを大きく覆すものでした。

この展覧会の魅力の源は、担当学芸員が企画を練り上げる中での中国の作家やキュレーターたちとの等身大の関係性ではなかったかと思います。同じ時代を生活している人間であるという当

たり前のことが、企画の息づかいとして来場者に伝わったことが、多くの、特に若い市民の共感につながったように思います。

12月からは、「バブルラップ:『もの派』があって、その後のアートムーブメントはいきなり「スーパーフラット」になっちゃうのだが、その間、つまりバブルの頃って、まだネーミングされてなくて、其処を「バブルラップ」って呼称するといろいろしっくりくると思います。特に陶芸の世界も合体するとわかりやすいので、その辺を村上隆のコレクションを展示したりして考察します。」という長いタイトルの展覧会を開催しました。

村上隆は、芸術界に様々な旋風と波紋を広げ続ける現代芸術家であり、膨大な作品のコレクターであり、優れたキュレーターでもあります。今回の展覧会は、彼の膨大なコレクションを通じて、「バブル」という時代の芸術を問う、極めて硬派な展覧会でした。立体、写真、絵画をいう、従来のスタイルの作品から、それまでの常識を覆す素材の作品、マンガ、アニメのように「サブカル」として「芸術」から外されてきた作品やコンピュータを使った「プリント」作品など、どこまでが芸術で、何がそうではないのかを作品それぞれが私たちに問ってきます。更に進むと突然、膨大な量の陶芸の世界に足を踏み入れることとなります。陶芸は、元来人が道具として使うものとして生まれた日用雑貨。一方で目の飛び出るような値段のつくような「作品」もあります。本当に人々に愛され、慈しまれるのはどちらで、芸術の価値とは何なのでしょう。

50年代にテレビ放送が開始され、テレビアニメやマンガ雑誌全盛期の時代を経てバブルの時代に大人になったアーティストたち。画面の向こうの世界が急激に身近で当たり前になった時代に育った彼らによって制作されたスーパーリアルやヘタウマなど、商業ベースを恐れないたくさんの表現方法が泡のように生みだされたバブルの時代。アーティストが作る作品は、いつも時代と共にあり、その影響を受けないことはあり得ないのだという事実と、改めてアートとは何かを考えさせられる展覧会でした。

村上はこの熊本の展覧会で、バブル時代のアートムーブメントを新たに、「バブルラップ(気泡緩衝材)」と名付けました。

現代美術の展覧会には必ず、同じ時代を生きる人間としての共感を覚える瞬間があります。それは時に違和感であることもありますが、自分の人生だけでは決して経験し得ないような、人の気持ちに想いを馳せるきっかけにもなり得るのです。

美術館のスタッフはいつも時代の動き、市民や来館者、街なかへの様々な目配り心配りを行いつつ、活動を行っています。

2014年度に館内に開設した、日本で唯一の美術館の中にある、地域子育て支援拠点施設「まちなか子育てひろば」は、館内に「ただ同居している」のではなく、双方のスタッフのきめ細かい情報共有や、子どもたちへの気配りによって、熊本のママ友たちのなくてはならない憩いの場所となっています。

また、第2回目から毎年お手伝いしている、お隣の商店街が行う上通アートプロジェクト。8回目となる今回は、大人気の上通演劇まつりを「チェルフィッチュの〈映像演劇〉」展にあわせて開

催しました。こちらは〈映像演劇〉とは異なり、「見る人」と同じ空間を共有する8組の劇団やダンサーが出演。上通商店街を舞台にしたオリジナル演劇では商店街の店主たちも熱演。アートなんて「いっちょんわからん(全然判らない)」という店主たちの奮闘は笑えて泣けて、アーティストやアートが、人と人をつなぎ、人の気持ちを動かす瞬間を目のあたりにすることができた素晴らしい企画でした。

他にも、市内の小中学校を対象にしたアウトリーチは、美術に留まらず、邦楽、声楽、演劇、ダンス、能など、ジャンルを超えて実施。しかもこれらを、いつもは経理や会計事務を司る総務のスタッフが中心となって行っているのは、当館の特徴のひとつかもしれません。また、行政各課からのご相談も年々増えており、今年度も全国緑化フェアの準備、日仏自治体交流会議の開催等への協力をさせていただきました。

2017年度末、熊本市は文化庁長官表彰を受賞しました。受賞の理由には、熊本城の復興と、熊本市現代美術館の活動があげられていました。

2018年9月に、この受賞を記念して、大西一史熊本市長と桜井館長が「アートがまちと人でできること」というテーマで熱く語り合いました。その中でモデレーターからの「20年後の熊本市とそこに暮らす市民のためにこれからチャレンジしたいこと」という質問に対して、桜井館長は「世界がどのように変わっても、市民に必要とされる美術館でありたい」、大西市長は「文化的な会話が弾むまち、ただ単に衣食住が足りているのではなく、心の潤いを市民が感じられるまちにしたい」と発言されていました。

2018年度、熊本市の外郭団体職員である私たちが、現代美術館の指定管理を非公募で任せただけのことになったのは、20年後、「市民が心の潤いを感じられるまち熊本」になるために、「文化的な会話が弾む」場として、「市民から必要とされる美術館」にすることを任されたのだと思っています。

桜井館長の遺志を継ぎ、市民に必要とされる、いつも市民とともにある現代の美術館として活動を続けること、それは、市民の皆さんとともに、この時代を心にゆとりと潤いを持って生きていく方法やきっかけを模索し続けることなのかもしれません。

※桜井武館長は、2019年6月4日に逝去しました。